

---

# 魔法使いの事情

愁しゅう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの事情

【著者】

Z7291E

愁しゆう  
愁しゆう

【あらすじ】

オレの職業は魔法使い。願いを叶える代わりに、『記憶』っていう対価を受け取ってるんだけど、いまは仕事でミスをやらかしたんで無料奉仕中…。しかも、その対価はオレが払わなくちゃなんなくて…。

「ナ、オ、おまえ、やらかしたんだって?」

出社早々掛けられた同僚・凧綱なつなの、ともー!楽しそうな声に、オレはつぶやいた顔でおもいつきり振り向く。

バシイツ オレサマ自慢の長い黒髪が、そいつの顔を派手に打ち付けた。

「…………」

「うるせえよ

けつ 痛さのあまり声にならずに蹲るヤツに吐き捨てて、オレは自分の部署に向かう一步を踏み出した。すると…

バッターン! 前につんのめつて、思いつきり顔からすつ転んだ。

「…………」

一瞬、何が起つたのか理解できなかつた。

ただ、額と鼻がジンジンと強烈な痛みを訴えている。

「あつはつはつはつ!おれを無視するから…がふつ

高笑いしつつ仁王立ちしているウスラトンカチの顎に、転んでも離さなかつた杖の先をおみまいしてやつた。

どうだ、最高級の水晶の味はツ!

笑つてやりたいが、まだ顔が痛くて表情が動か…ねえ。

「おまえつーひとが心配してやれば…つ

「誰が頼んだよ…」

ばつこちーん かたや口の端から、かたや鼻から血を零しながらも、胸倉を掴みあつオレたちの後頭部に、強烈な一撃が飛んできた。キラキラと瞼の裏に星が散る。

「…鼻だけじゃなくて、田からも血が出そつ…。

「…あんたたち、痴話喧嘩なら外でやつてくれる?」

きりーん いろいろと最強な社長がにっこりと笑つて、虹色に光る水晶を頂いた杖をオレたちに突きつけ、地響きがしそうな恐ろ

しき低い声を放つた。

「あ～あ、おれ好みの顔が擦り剥けてんじやん」

「…誰のせいだと…」

鬼ババア（社長）に尻を蹴飛ばされて社内から追い出されたオレたちは、会社裏の木陰のベンチで一息ついていた。

慣れてはいるが、真夏の炎天下で真っ黒のローブはさすがに暑苦しい。

そのうえ、さつきから隣にいるヤツが、濡れたハンカチでオレの顔を拭こうとしてるのが、かなり鬱陶しい。

「おまえがつれなくするからだろ」

「いぢいぢウザインだよ」

「…つたく、捻くれてんだから」

大人しくしろ、と言われて仕方なく目を瞑る。

冷たく濡れたハンカチが気持ちいい。

「…つん」

ペタペタと濡れた布地が肌を滑る中、違う感触のものが唇に触れた。

唇の上を這うソレが、その間をノックし始めたところで、ガツンと頭突きをかましてやる。

「てめつ、往来でナニしやがる！」

と言つても、オレたちの姿は周囲には見えない。

「え～…、フレンチは嫌がんなかつたのに」

「阿呆かッ！」

ガツ もう一発、今度は腹に足蹴を喰らわせた。

凧綱は声もなく、その場に沈んだ。

…顔が熱い。

あ～、もう！ナニやつてんのかはオレだよ。  
なんか、疲れてんのかな…。

大体、それでなくともコイツにいろいろ負けてんのに、そのうえ

仕事でちょっとばっかミスしたくらいで無料奉仕のペナルティは厳しそうないか？

溜息をつくオレの前を、風船を持った小さな子供が通りかかった。  
ふわあつ 子供が手にした赤い風船は、その小さな手からすり抜ける。

「うわああんつ」

途端に火がついたように泣きだす子供。

オレはもう一度深く息を吐き出して、子供の前にしゃがんだ。

「キミの願いを叶えてあげる」

「ね、が…い…？」

「うん。何か、して欲しいことはある？」

アヤシサ大爆発な真っ黒い格好をしたオレだけど、子供はあまり驚かない。

純粹だなつて思つけど、いろいろと物騒なこの時世には心配だな。

太陽の光でキラキラと輝く杖を見て、子供はしゃくりあげながら飛んで行つた風船を指差した。

「ふうせつ、とんでつ…とつてつ」

「キミの願い、叶えよつ」

オレが杖を振ると、それに応えるように、水晶から眩い光の星が子供に降り注ぐ。

「わあつ」

みんな、最初はきれいだとうつとつとしているけど、かなり眩しいためにすぐに目を閉じる。

それはこの子も同じで、口だけポカンと開けている子供の手に、しつかりと風船の糸を握らせるど、オレは三歩うしろへ下がつた。

光の洪水はジャスト七秒。

「あつ！ふうせん！あれ？まほつつかいさん？」

すぐ傍にいるけど、もつ子供の目にオレの姿は映らない。

「ありがとう！」

大きな声で叫ぶ子供に、周りにいる大人たちが驚いた顔をしている。

「誰にも、オレの姿は見えない。」

「…どう、いたしまして」

喜んだ顔を見るこの瞬間だけが、オレの『無料奉仕』が報われる瞬間だ。

「ふうん。そんな可愛い顔もするんだ?」

「つるさー」

「ニヤニヤした顔するんじゃねえよ!」

ついでに…肩、抱き寄せんなよ…ほつとするだろ。

仕事をしたあとは、なんというか…寂しさが残る。

それは、ついいままで話をしていたのに、近くにいるのに相手にはオレの姿が見えなくなってしまうから。…ひとりぼっちになる気がするからだ。

子供みたいだと、言われるかもしれない。

…けれど、何年同じ仕事をしていくてもその寂寥感から逃れられない。

「おれもナオに願い、叶えてもらおうかな」

慰めるようにオレの頬を這う唇に、安心したオレは瞼をあらした。

「…何、を?」

「おまえが、おれを好きになりますように、つて」

「…阿呆」

ちゅっ、と瞼に落とされる唇に、オレは愛しい想いをこめて、そう罵った。

オレの職業は魔法使い…といつ名の、サラリーマン。

株式会社愛夢叶<sup>アムト</sup>という、いろいろ派遣会社（なんでも屋）の社員。社員の大半はオレみたいな魔法使いだけど、凪綱のようなフツーの人間もいる。

オレの仕事は、ひとの願いを叶えるという古典的かつ、シンプル

なもの。

ただし、魔法というのには制約というものがあつて、個人や力量によつてその度合は違う。

ちなみに、オレの制約は『ひとりにつきひとつ』、『善人のみ』、『自分と自分に近しい人間は不可』、『対価は記憶』。

対価というのは、願いを叶えるために支払つてもらうお金のようなもので、オレが受け取る対価の『記憶』が会社にとつて何の利益を生み出すものなのか、オレは知らない。

しかし、いま現在のオレは『無料奉仕』のペナルティ遂行中のため、相手から対価は受け取れない。

そのため、その対価はオレが払つている。  
…願いを叶えてやつて、その対価も自分で払つてたら、働く意味がねえよ…。

いまのところ、小さな願いしか叶えてないから、オレが支払う対価も夕飯の献立だとか… そんな些細なものだけ、もし大きな願いを叶えるハメになつたら。

一番大切な記憶を、手放すことになる。

「…ナオ」

凧綱の匂いがするベッドの上、身じろぐオレの髪を彼の吐息が掠めた。

「ん…？」

大きな手が、ゆつたりとした仕草で髪を梳く。至福の時間。  
…失いたくない、記憶のひとつ。

呼ばれるまま顔を上げると、困つたような表情の凧綱の顔。もつと困らせてやるうと、ぎゅうっと腕に抱きついてやる。すると、おいおい、と笑つて覆いかぶさってきたもんだから、ぐえつとカエルが潰れたような声が出た。

「そろそろ出社だ」

「そつか。オレもだな」

よつこいせ、と掛声一発起き上がると、ゲラゲラ笑われた。

「ジジ臭いぞ」

「つるせえ」

仕方ないだろ、腰が重いんだからツーー言多いし…  
着替えて、ふたりで姿見の前に立つて服装を整える。

凪綱はスーツ、オレは黒いローブ。

並んで立つと、別世界の人間だ。そう自覚すると、胸が苦しくなる。

「ナオ」

「…つあ」

いきなり、ぎゅうっと強く抱きしめられた。骨が軋みそうなほど  
強い抱擁。

「泣きべそかくなよ」

「誰が」

ガブツと首元に齧りつくり、凪綱は『いやん、痕はつけないで』  
とふざけた。

そんな他愛のないやり取りが幸せで、切なく震える胸が綻んでいく。

思いつきり息を吸つて、凪綱の匂いを体内に溜めこんだ。  
ひとりで、立っているための、オレだけの魔法。

「いってきます」

掠めるだけの口付けは、それだけでも十分に甘く心を癒した。

「…最近、猫つて流行つてんのかな」

今夜はふたつの願いごとを叶えてきた。

ひとつは『猫になりたい』人間、もうひとつは『人間になりたい』  
猫。

前者は昔見た夢をもう一度つてリクエストだつたから、本当に猫  
になつたワケじゃないけど。

支払つた対価は、と記憶をさかのぼつてみる。

…今日の朝飯と…凪綱と、の…。

あれ？

「…さつきまで、一緒にいたよな？」

一緒にいたことは、覚えてる。

ただ、その間にあつた出来事が思い出せない。

だんだんと、対価が大きくなつてゐる気がする。

…いや、ふたつめの願いは、生を曲げることだつたから、だ。  
思ったよりもずっと大きかつた対価に、打ちのめさせられた。  
それにして、払つてゐるのは「ぐぐく最近の記憶。  
精彩を失つていく過去のモノではなく、明瞭なモノ。

突きつけられた現実に、突然目の前が真っ暗になつていく。

オレはどこか楽観視しすぎてたのかもしれない。

対価という言葉が示す本当の意味を、履き違えていたんだ。  
「うそ、だろ…」

くらり、と眩暈がした。

あといくつ、願いを叶えたら解放されるんだる？  
社員必携の電子手帳を開くと、まだ一桁の数字が表示されている。  
カツン 手から滑り落ちた手帳がコンクリートの地面に落ちて、  
かたい音を立てた。

「…つ！」

地面に膝をついて、絶望に蹲るオレの姿は、人通りの多いこの場所でも誰の目にも映らなかつた。

「ナオ！」

会社の休憩室で、生暖かいカフェオレを啜つてゐると、なんだかスゴイ形相で凧綱が入つてきた。  
胸倉を掴みそうな勢いだつたけど、先に牽制して杖を掲げたオレに、凧綱は小さく舌打ちした。

…いきなり喧嘩かよ。なんか…したつけ？

心臓が嫌な音を立てるのは、対価の『記憶』がどの部分を搔つ攫つてゐるのかが、いまのオレにはもう判らないからだ。

「…なに」

内心の動搖を気付かれないように、カフュオレをちびちび舌先で突いて返事をすると、凧綱はドサッと乱暴に隣に座った。

「なんで、来なかつたんだよ。ずっと、待つてたんだぜ？」

…ああ…。

とうとう、ここまできたか。

オレは、凧綱となにか約束をしたんだ…。でも、それがどうこう内容なのか、カケラも思い出せない。

そんなことがあるからと、最近はこまめに手帳に記していたはずなのに。

よりにもよって、凧綱との約束を忘れてしまつだなんて。

「なんか、約束してたつけ？」

「おまえ…っ」

今度こそ胸倉を掴まれた。

甘い、恋人と呼べる関係のオレたちだけど、普段はライバルであり、友達もある。

それこそ容赦なく殴り合ひの喧嘩もする。互いの信頼を認める関係。

心も、体も…オレのすべて捧げても構わないと思つのは、凧綱だけ。

そんな、約束と嘘に厳しい凧綱に、覚えのないものを、覚えていふことは言えない。

「じめん、の一言で済む問題もあるのだろうけど、これから先、しきつちゅうこじんなことがあれば、どうにも繕えない。

…傷つくるのは、少ないほうがいい。

凧綱、ごめんな? オレ…弱いんだ。

「…最近、疲れてんだよ。いちいち、おまえに付き合つてられねえつての」

凧綱が振り上げた手を見て、殴られると思ったオレは目を瞑つた。しかし、待つても一撃が襲うことはなく、目を開けると、眉間に

皺を刻んで、なのに哀しげに瞳を揺らした凧綱の表情が映った。

「…おれが、おまえを殴ると思ったのか？」

絞り出すような苦しげな声に、ぎゅっと胸が締め付けられた。

こんな顔をさせたいワケじやなかつたのに…。

…いつそのこと、氣を失うくらい殴つてくれれば…と思つのは、オレの自己満足に過ぎないのか…。

「おまえが、初めて誘つてくれて嬉しかつたのに」

…はは、最低だな…オレ。

てつくり、いつも凧綱からしつこく誘われるから、今回もそうだと思つたけど…オレはなにを誘つたんだ?

…思い出せない、か。

「そうだっけ?…まあ、どっちでもいいや」

投げやりな言葉に、凧綱は胸倉を掴んでいた手を離した。糸が切れたように椅子に沈むと同時に、背もたれにしたたかに背中を打つた。

…こんな痛みじや、物足りない。。

傷ついたのは、オレじやなくて凧綱だ。

自業自得のオレよりも、凧綱のほうがずっと…傷ついてる。

「…おれに言つことはないのか?」

やわしいな、凧綱。もつ、オレなんか放つておけばいいのに。

本心は…全部、ブチ撒けてしまいたい。

不安も、畏れも、凧綱への想いも。

けれど、小さなプライドがそれを邪魔する。

とろけるほど甘いその腕の中に、すべてを委ねてしまいたいと思うのに…どうして、こんなに捻くれているんだひつ~。

「おまえに話すことはない

「わかった」

低い声で顎を骨を向ける凧綱が、オレを見る」とはもつないだ

う。

きっと、凧綱はオレが嘘をついていることに気づいている。

けれど、オレが本当のことを言わないから、余計に怒ったんだ。

：約束破つて、嘘ついて。凪綱を幻滅させて。

オレって、なんのために…魔法使いなんてやつてるんだろ？

好きだよ、凪綱。

口には出したことないけど、おまえが思つてるとつづつと愛して  
る。

でも、ちよつなら。

「…なんなの、これは」

お約束の『』と、表に『デカデカと『辞表』と書かれた封筒を出した  
オレに、社長が怪訝そうな表情をした。

「辞表です。…ペナルティは最後まで遂行しますが、それまでの契  
約といふことで」

「辞めてどうするの？普通の人間でもないあんたが  
魔法を使う以外に、なにも取り柄がない自分を知つて  
いるだけに、  
そう言われてしまうとなにも言い返せない。

凪綱のように神憑り的な営業力でもあればいいけど、こう見えて  
オレは激しく人見知りする。

普段は顔を見せまいと、深々とフードを被つてる不審人物でしか  
ない。

「結構、対価が身に染みてるみたいねえ…。凪綱くんのこともある  
の？」

…恥ずかしい話、社内にオレと凪綱の関係は知れ渡つて  
いる。

特に、この見た目は二十代な社長はオレの母親でもあるわけで。

「」

凪綱とは、あの日以来顔をあわせてない。

もともと部署が違うから、互いに会おうと思わなければ顔をあわ  
すこともない。

この状態に陥つて、どれだけ、凪綱がオレに会おうとしてくれて  
いたかが判る。

「彼に、あんたの対価がなんなか話してないんでしょう。それで理解されようだなんて、無理に決まつてるわ」

「…理解されようなんて思つてない」

ただ、逃げただけだ。

オレがこれ以上、廻綱とのことを忘れてしまわないので。

「まあ、辞めるも辞めないも、いまのあんたじや、すぐに魔法も使えなくなるわね」

社長はオレの持つ杖についた水晶を見て、やれやれと嘆息をついた。

水晶の輝きは、そのまま持ち主の生命力を示している。

生命力は、魔力へと繋がり、その力を魔法として行使できるんだ。

濁つた水晶は、病んだオレの心を隠さない。

誰が見ても、オレが調子を崩しているのが判る。

「とりあえず、これは預かっておくけど。自分がこの世界で生きていくにはどうしたらいいのか、よく考えなさい

…生きていく、か。

いまは、生きていることにも疲れてる。

もともとは、自分の招いたことだけど…ひとつを幸せにあらねますの

魔法の存在意義を疑つてしまつ。

幸せの対価。

そんなものを支払つて、本当の幸せは手に入るのか?

「魔法使いさん」

突然声をかけられて、オレは驚いて振り向いた。

ここにことやさしげな眼差しで立っていたのは、髪も目も服も真っ黒な、十六、七の少年だつた。

見たことのある顔、だ。

誰だつて?つづーか、なんでオレの姿が見える?

慌てて周囲を見渡すと、公園にいる誰もがオレを見ていた。

明らかに異形のものを見る視線に、恐怖を覚えた体が強張る。

はつとして水晶を見ると、完全に輝きを失っていた。  
いまのオレには、姿を隠す魔法すら使えないらしい。

「お久しぶりです。暑くないですか？」

パサツ 彼の手が、やさしくフードを落とした。

普段なら、顔を出すのは嫌だし、誰かに触られるのは以外の外だ。  
なのに、なぜかほつとするのは、彼の雰囲気がとてもやわらかい  
からだろ？

「ちょっと、座りませんか？」

彼に手を引かれて、太陽の光で熱くなつたベンチに腰かけた。  
隣に座つた彼の膝には、それが定位置なのか、すぐに三毛猫が座  
つてまるくなつた。

「昼間も歩くんですね。びっくりしました」

「あー…たまたま…」

オレが誰か判るつてことは、オレが願いを叶えたうちのひとりだ  
ら。

そんなふうに、幸せですつて顔をされると、嬉しいのに憎りしく  
なつてくる。

ダメだ。そんなんじゃ、もう魔法は使えない。

制約が『善人』である以上、かける人間も善きひとでなければな  
らない。

いまのオレにはその資格がないから、だから水晶の光も失せてし  
まつたんだ。

「ずっと、お礼を言いたいって思つてたんです」

「…別に。仕事だし」

ムスツとして、大人げないと思つけど、彼はオレには眩しそうる。  
彼はそんなオレの態度にも、にこにこと人の好い笑顔を向けてく  
れた。

「そういえば、願いを叶えてもうつには、代わりになにかをあげな  
くちゃいけないって、本で読みました」

「普通は、な。いまはキャンペーン中だから、いいの」

「いって顔、してないですよ？ボクで払えるものがあるなら、お支払いします」

気軽に言つた。

記憶がなくなるつてのは、結構ダメージが大きいんだよ。今まで、ずっと気にしないで対価を受け取つてきたけど、本当はこんなに辛いことなんだ。

「大切な、思い出がなくなつてもか？」

「なくなつたら、またつくればいいじゃないですか」

「お気楽だな」

どうしたら、そんな前向きなことが言えるんだ。

本当に失つても、同じことが言えるのか？

頭を抱えるオレに、やわらかい彼の言葉が降り注ぐ。

「少なくとも、ボクは猫だったときにはできないことができるようになりました。届かないって思つていて想いも届きました。だから、一番の願いが叶つて代わりに大切なにかが無くなつても、またつくりなおします。いまのボクにはそれができるし、一緒につくれるひともいるから」

顔を上げると、オレよりもずっと年下のはずなのに、達観した彼が諭すようにオレを見ていた。

「だから、ボクでできることがあるなら、恩人のあなたがそれで元気を出してくれるなら、喜んで差し出します」

猫の恩返し？ちょっと違うかな、と彼は微笑んだ。

…オレの魔法は、彼のようにみんなを幸せにしているんだろうか？こんなふうに、オレにやわしく微笑んでくれるんだろうか？

オレのしていることは、間違つてない…？

『ありがとう…』

風船を手にした子供の声が脳裏によぎつた。

対価を支払うことを実際に我が身で体験して、自分の仕事にまで

疑問を持つよくなつてしまつた。

決して、良いことではないけれど、彼のよつて本当に幸せになつ

てくれるひとがいるなら、それは必要悪なんだらうか。

ふわり やわらかくあたたかな言葉に心が浮上していく。

「…ありがとう。キミに会えてよかつた」

「なに言つてゐんですか？お礼を言つのはボクなのに。ありがとうございます、魔法使いさん」

「キミはいま、幸せ？」

問つ必要のない問いに、それでも彼は満面の笑顔で

「はい。とつても、幸せです」

ひつちまで幸せになる笑顔をくれた。

すると、突然彼の膝で眠つていた猫が顔を上げて、『なあう』とひと鳴きした。

「お迎えがきたみたいですよ」

「え？」

オレには判らないけど、ふたり（ひとつと一匹？）には判るようだ。

首を傾げるオレの手にも、すぐにその姿が入つてきた。

「ナオ！」

いつも整えている髪を振り乱して、ネクタイもだらしなく下げた姿でこちらに走つてくるのは、凪綱だった。

「ナオっ」

飛びかかるように抱きしめられて、顔に凪綱の汗が散つた。

「な…づ、な…つ」

恋しかった凪綱の匂いを感じて、途端にポロポロと涙が零れた。凪綱の前で泣くなんて、なんという失態だ。

でも、嬉しくて…止まらない。

「魔法使いさん、願いも叶うといいね」

「も、叶つ…た…」

鼻を啜りながらの情けない声に、彼はあたたかく微笑んだ。

「…どうして」

まだ力の戻らないオレは、真っ黒なローブといつアヤシイ姿のまま、スース姿の凧綱に手を握られて歩いていた。

…周囲の視線が痛い。

けれど、手を離そうとすると、今度は抱きしめられてしまつから、これ以上どうすることもできない。

「どうしてこんな場所にいるのが判つたかつて？」

凧綱が不機嫌を隠しもしない表情で指した場所は、この付近で一番大きな高層ビルだ。

そういうや、社長が今度あれを超すビルを立ててやるつて息巻いてたな。

「あそこが、おれがいま派遣されてる会社。それで、昼飯を買いに出てた奴が『マンガから飛び出てきたような黒装束の美人』がいた、とか言うから」

「そんなの、オレと限らねえだろ」

「魔法切れするようなドジはおまえしかいだらうが」

おまえが調子悪いの、おれが知らないとでも思つたのか、と低い声で言われて、悔しいけど図星なオレはきゅっと唇を噛むしかない。

オレの手を握る凧綱の手の力がさらに強くなる。

痛いくらいの圧力は、彼の心からの怒りと心配。

「…おまえの魔力が消えたつて連絡がきたとき、おれがどれだけ…」

水晶にはGPS機能もあって、いまのオレのもののように力が無くなつた水晶では機能は停止する。

水晶の光は生命力。つまり、それが消えてしまつといふことは、持つてゐる本人になにかがあつたということだ。

生まれてからずっと、水晶と過ごしてきただけど、光を失つたのは初めてだ。

それだけ、心に巢食つた闇が大きかつたんだ。

生きる、ということを放棄しそうになるまでに、心を追いこんだ。

「そしたら、もっとマシな奴と付き合えるだろ」

誰が見ても魅力的な容姿と、どんな仕事を完璧にできる手腕と頭

脳。

実はライバルとか言つてるのはオレだけで、魔法使いの中でも落ちこぼれに近いオレには手の届かないようなひと。

捻くれたオレの言葉に、凧綱は立ち止まる。

「…バカだよな、ナオは。そこが可愛いんだけど」

「つん」

振り向くなりいきなり唇を攫われて、オレは目を瞪つた。  
いまは姿を消していない。しかも、ここは凧綱の職場のすぐ側で、一番人通りが多い昼間で。

そんな場所で、見るからに不審者のオレに…なにすんだよッ！

ドガツ 目一杯力を込めた拳が、凧綱の腹にめり込んだ。

「…お、おま…っ」

ズルズルと地面に崩れしていく凧綱に、杖で止めの一撃を喰らわせる。

「恥を知れ！」

真っ赤な顔でなに言つてんだ、と思いながら、なぜか周囲の拍手を受けたオレは、そのまま走つてその場を退散した。

すぐに追いついてきた凧綱に、今度こそ容赦なく拘束されたオレが、彼の傍から離れることができたのは、別の意味で氣力も体力も失つた翌朝のことだった。

目が腫れぼつたくて、声もガラガラ。おまけに身体と足取りが重いのは、殆ど寝てないからという理由だけじゃない。

そんなワケで、自主休社を決め込もうとしてたら、社長から呼び出しを喰らつて出社するハメになつた。

「ナオ、本当に大丈夫か？」

「…おまえがそれを訊くか？」

隣を歩く凧綱が支えよつとするのを断固拒み、杖に両手で縋つてズルズルと歩く。

何度かロープの裾を踏みそうになりながら、たどりついた社長室

の前で凪綱と別れた。

ノックをする前に、大きく深呼吸して姿勢を正す。

こんなダラけた姿で入った日には、なにを言われるか判つたもんじゃない。

しかし、オレの苦労虚しく、『失礼します』と入った声と、水晶の輝きを見るなり社長は手でパタパタと顔を扇いだ。

「は〜…ヤラシイわねえ」

「つ！…うう…つ」

ボツ 頬が火を噴いた。

一晩ですっかり光を取り戻した水晶は、オレ本人の体調をよそにキラキラと輝いている。

…誰か、コレを制御する方法を教えてくれ…。

「それで、どうするか決まつた？」

「…」迷惑をおかけしました

素直に頭を下げると、社長は引出しから取り出した辞表を田の前で破り捨てた。

それから、と手帳を出すように言われて、溜息をつきながら差し出す。

…また、ペナルティが付くんだらうな。

凪綱によると、社員全員にオレの搜索命令がくだされたらしい。

それだけ、水晶の光が消えるというのは大変なことなんだ。

朝から消えてたんなら、もっと早く気づけよ自分…。

せめて、毎朝会社に顔を出す習慣でもあつたなら、これほど大事にならなかつたんだろうけど。

…みなさん、申し訳ゴザイマセん…。

「はい」

「…え？」

返された手帳を見ると、残りの無料奉仕回数が消えていた。

驚いて社長に顔を向けると、彼女は大きな溜め息をつく。

「もう十分反省したということにしましょう。…わたしも、心臓が

止まる思いをしたわ

心配かけて、とあやすように抱きしめてくれるその腕は、社長ではなく母親のものだつた。

「「めん…母せん」

「あなたが女だったら、せつねといふんな仕事辞めさせて、凪綱くんに貰つてもらひのに」

「…それは…」

「…うされれば一番なんだナビ。そうできなにのが現実。

…あいつと凪綱は、オレが望めば小さな箱庭の中に閉じ込めて、うんとやせしく可愛がつてくれるのだろうけど。

「男なんだから、ずっと隣で一緒に歩いて行けるように、強くなりなさい」

「はい」

本当に自我ばかり強くて、中身が脆くてみつともない。

強く、やせしく、あたたかく…そして幸せにならなこと、誰かを幸せにすることができないだら。

「それにしても、凪綱くんにももう少し加減してもらひなに言わない」と。事情が事情だけど、翌日に休むへりこ酷使するのはちゅうと、ねえ?」

「…は、い…」

母親にそんなコト言われるほど、恥ずかしいものはない。

…凪綱、殺ス…。

オレはしばらく赤くなつた顔を上げられなかつた。

「おまえさあ、もうけよつと手加減つづーもんを…」

頭に「デカイたんこぶを拵えた凪綱が、頭を擦りながら舐めしそうにオレを見下ろす。

「どうやらかなり心配してたみたいで、一度社長室の前で別れたもの、引き返して待つていたらしき。

母親に忠告された居たまれなを引き摺つた、オレの前にこの

の姿を現すからだ！

「ん…でもまあ、ツンデレ萌え」

「はあ？」

「ナオみたいのを、巷ではツンデレって言つんだよ」  
最近の言葉に疎いオレが首を傾げると、凧綱はオレの腰をぐいっと引き寄せた。

…まだ懲りねえのか、この男は…。

「普段はツンツンしてるけど、ベッドの…ぐは」  
ニヤけた男の顎に、ガツンと頭突きをきます。

最後まで聞かずとも、言いたいことは判つた。

くそ…顔が熱いのがムカつく…凶星つてか？んなワケねえよつ！  
ただ、ちょっと…甘えたがりなだけだ。

「一回、死んでこいッ！」

もう知らん、こんなヤツ！

置いて行こうとしたら、ぎゅっと手を掴まれた。

「おれが死んだら、泣いてくれる？」

真摯に見つめてくる瞳に、どきどきと胸が高鳴つた。

オレが、こんなにも凧綱が好きなこと、おまえは全然判つてない。

「…死んだら、殺す」

「なんだよ、それ」

どつちにしろ死ぬだろ、と笑う凧綱の、オレの手を掴んだままの手を引いて、バランスを崩した彼の唇に自分のソレを、一瞬だけ触れ合わせた。

驚いた凧綱の表情が可笑しい。鳩が豆鉄砲？みたいな。

途端に真っ赤になる凧綱に、オレは大いに満足した。

だから…一度だけ、素面で言つてやるから、ちゃんと聞けよ？

「凧綱、大好きだよ」

「！ ナオ…っ」

ぱつこーん 飛びかかってきた凧綱を杖で一蹴して、びしつと指を突きつける。

「しばらぐ、おあづけだからな！」

「判つた。おまえから、ねだるよう仕向けてやるから」

「じにそんな自信があるのか、凪綱は全然懲りてなかつた。

凪綱に読まれてるのは悔しいけど、勝負は最初からついてる。

：惚れた弱み、つて言葉があるだろ？

一度、甘くて心地いいところに浸かって溺れてしまえば、そこから抜け出すのは至難の業だ。

「キミの願いを叶えてあげる」

今日もオレは仕事をする。

まだ、これが正しいことなのか判別できることもあるけど、それでもキミが少しでも幸せになれるのなら。

オレの持てる力のカケラを分けてあげる。

「なんでも、ひとつだけ叶えてあげる」

それが、キミの大切な思い出と引き換えてもと望むモノであるなら。

「キミの望むモノはなに？」

叶えたら、キミは幸せになれるだろ？

素晴らしい未来が拓けるだろ？

迷つていた一歩を踏み出せるだろ？

その手伝いを、させてもらえるかな？

対価を受け取るのに、おこがましいけれど。

「キミの願い、叶えよ？」

キラキラと、星が降る。

願いを叶える、キミの流れ星が。

(後書き)

完璧な「メモリー」を目指してたハズなんですが……あれ?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7291e/>

---

魔法使いの事情

2010年10月8日15時57分発行